

依頼に対する断り表現について

清水 勇吉ⁱ 石田 基広ⁱⁱ 岸江 信介ⁱⁱ

Refusing requests

Yukichi Shimizu Motohiro Ishida Shinsuke Kishie

Abstract

In this paper, regional and gender differences found in expressions of refusal as used by university students are analyzed, as well as patterns of semantics formulas, forms of apology, forms of explicit refusal, and levels of consideration.

It was found that though the content of the requests were identical, the social position of the addressee as a senior or a junior as well as the respondent's gender were factors in differences of expression. As for regional differences, it was found that the rate of explicit refusal was common for males from the western region, such as the use of the word "impossible" toward juniors, and the value of sample variance was high. Females from the eastern region frequently proposed alternative plans and displayed sympathy, especially toward seniors, and also displayed a low value of consideration. From these characteristics and others, it can be said that regional difference can be counted among the factors for difference in expression.

1. はじめに

人は他人とコミュニケーションをとるとき、何らかの目的をもっておこなう。

ⁱ Graduate School of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima

ⁱⁱ Faculty of Integrated Arts and Science, The University of Tokushima

他人に何らかの行為を要求する依頼や禁止、他人に高い評価を下す賞賛など、目的となる言語行動の種類は無数にある。これらは話し手から主体的にはたらしめかける言語行動だが、相手からの依頼や誘い、また勧めなどを受けてはじめて「断り」が現出するという点において、受動的な言語行動の一つに含まれるⁱⁱⁱ。蒲谷ほか（2009）は依頼を断ることの丁寧さの構造を、相手に要求された行動をおこなわないという決定権は自分にあり、結果として期待された利益・恩恵を受ける筈の相手にはそれが与えられないという形でまとめている。「断り」とはつまり相手からの行為要求に対して、拒否・拒絶を表明することに他ならない。相手が要求する行為を自分が実行することによって得られる筈だった利益・恩恵を奪うという点で、断る主体としての話し手に心的負担を与えるものである。

しかし依頼内容の軽重によって、また相手との上下・親疎関係によって心的負担の度合いは異なる。たとえばペンを貸すのを断る場面ではさほど気を遣う必要はないが、仕事の依頼を断るといった場面ではたいへん気を遣うであろうし、同じ内容の依頼でも、上司に断る場合と親しい友人に断る場合とではやはり心的負担は同程度だとは言えないだろう。このように一口に「断り」と言っても場面や状況の違いによって心的負担の度合いは大きく異なり、またそれに伴って表現の形式やそのパターンも異なっていくものと推測できる。

「断り」という言語行為をとる際に、自身の心的負担を軽減させるため、また相手への配慮をあらわすために、あるいはそうした負担や配慮を無視して、人はどのような方略を用いるのか。本論文では「断り」表現にみられる特徴を、地域差および性差の視点をもって明らかにしていく。

2. 調査概要

全国の大学生を対象に、依頼・禁止・感謝・謝罪・注意喚起・断りなどの場面を設定し、自由記述での回答を求める形式のアンケート調査を実施した。調査は2007年6月から2010年1月にかけて行い、2011年9月現在の有効回答数は743名である。ただし、本論文においては断り表現の回答が得られたものを対象としたため、「断り」の質問項目に対してすべて無回答であったものを除外しており、分析に用いるデータ件数は704名分である。分析に関わる回答者情報と、断り表現に関する質問項目の内容を以下に要約して掲げる。

ⁱⁱⁱ 日本語記述文法研究会編（2009）では依頼や禁止を持ちかけ系の対人行動とし、それに対する「承諾・許可もしくは断り・不許可の行動で反応」するものを応答系の対人行動としている。

	東北	関東	中部	北陸	近畿	中国	四国	九州	全体
男性	16	48	7	10	64	16	35	6	202
女性	71	132	13	27	152	44	48	15	502
全体	87	180	20	37	216	60	83	21	704

表1 アンケート有効回答者数（「断り」限定・出身地域別）

【場面設定】いつもたいへん世話になっている「先輩」／子供の時からずっと親しくしている「後輩」から来週の日曜日に引っ越しをすることになったので手伝いに来てほしいと頼まれました。しかし来週の日曜日はあいにく自宅で法事があるため、自宅に親戚中が集まります。家族の者からも必ずこの日は自宅にいてほしいと以前から頼まれていたとします。結局、この「先輩」／「後輩」の依頼を断らなければならなくなりました。

(1)この時、この後輩の依頼をどう言って断りますか。
 (2)この時、この先輩に対してどの程度「申し訳ない」と思いますか。下から
 適当なものを選び、回答欄に番号を記入してください。
 1.非常に申し訳なく思う 2.かなり申し訳なく思う 3.少しは申し訳なく思う
 4.あまり申し訳なく思わない 5.まったく申し訳なく思わない

表2 断り表現に関する質問項目

本論文では以下、東西差をみるために、東北、関東、中部地方を東日本としてE、それ以外の地方を西日本としてW、また男性をM、女性をFとして表記する^{iv}。

EM	EF	WM	WF	計
69	211	133	291	704

表3 アンケート有効回答者数（「断り」限定・回答者属性まとめ）

3. 意味公式にみられる特徴

回答にあらわれた「断り」表現を構成するものについて、蒙（2010）を参考

^{iv} 東日本出身男性をEM、東日本出身女性をEF、西日本出身男性をWM、西日本出身女性をWFと表記する。また、EMの先輩への断りの回答に関しては「先輩(EM)」として表記するものとし、以下同様である。

に便宜的に五つの意味公式に分類した。以下に各意味公式、意味機能、例を列挙する。

「詫び」 : 相手の期待に添えない旨の表明

例: ごめんなさい、申し訳ないのですが、など

「理由説明」 : 相手の期待に添えない理由の説明

例: 家で用事があって、どうしても家を空けられないので、など

「断りの明示」 : 断る意思の明示的表明

例: お手伝い出来ないんですけど、行けません、など

「代案の提示」 : 代替手段の提示

例: その日以外なら手伝うよ、また何かあったら言ってください、など

「共感」 : 相手の期待に添いたい意思の表明

例: 行ってあげたいけど、非常に残念ですが、など

無論、これらのいずれにも分類されない「その他」も存在するが、その多くはフィラーや対象への呼びかけであり、また数も少なかったために分析からは除外した^{vi}。

	詫び	理由説明	断りの明示	代案の提示	共感
先輩(EM)	93.9%	97.0%	59.1%	3.0%	7.6%
先輩(EF)	96.6%	99.0%	64.2%	12.7%	13.7%
先輩(WM)	90.8%	93.1%	69.2%	8.5%	5.4%
先輩(WF)	97.6%	98.6%	64.8%	8.6%	11.4%
平均	94.7%	96.9%	64.3%	8.2%	9.5%

	詫び	理由説明	断りの明示	代案の提示	共感
後輩(EM)	92.4%	93.9%	72.7%	4.5%	0.0%
後輩(EF)	98.0%	98.0%	69.6%	7.4%	4.9%
後輩(WM)	83.2%	84.0%	84.7%	3.1%	0.8%
後輩(WF)	97.2%	94.8%	68.6%	6.6%	5.9%
平均	92.7%	92.7%	73.9%	5.4%	2.9%

表4 意味公式の出現率

表4には各回答者属性別に意味公式の出現率を百分率で示した。ただし、これ

^v 蒙 (2010) ではこうした回答を「関係維持」として扱っているが、“別の形で相手の期待に応える意思の表明”と判断し、本論文では「代案の提示」とした。

^{vi} 蒙 (2010) ではフィラーに類するものを「ためらい・相づち」として扱っているが、本論文では上記の理由で意味公式を立てていない。

は出現頻度の集計であるため、一つの回答中にたとえば「詫び」が二度あらわれた場合でも一件として集計している^{vii}。

意味公式と回答者属性を変数として、対応分析を用いて散布図を描いた。本論文では回答者の出身を東西に分類したため、以下、地域差と東西差は同義とする。図1の第1軸の寄与率は73.82%、固有値は0.0044、第2軸の寄与率は25.59%、固有値は0.0015、累積寄与率は99.40%であった。図2の第1軸の寄与率は90.24%、固有値は0.0089、第2軸の寄与率は8.94%、固有値は0.0009、累積寄与率は99.18%であった。

図1、2で共通しているのは「詫び」と「理由説明」の出現頻度が高いことである。相手が目上であれ目下であれ、依頼に対する断りにおいては「詫び」と「理由説明」の機能を有する表現が不可欠であると感じている回答者が多かったことがうかがえる。「断りの明示」に関しては先輩、後輩どちらもWMと距離が小さく、特に後輩(WM)では出現頻度が高いことから、後輩に対して西日本男性ははっきりと断りを表現する傾向にあると考えられる。

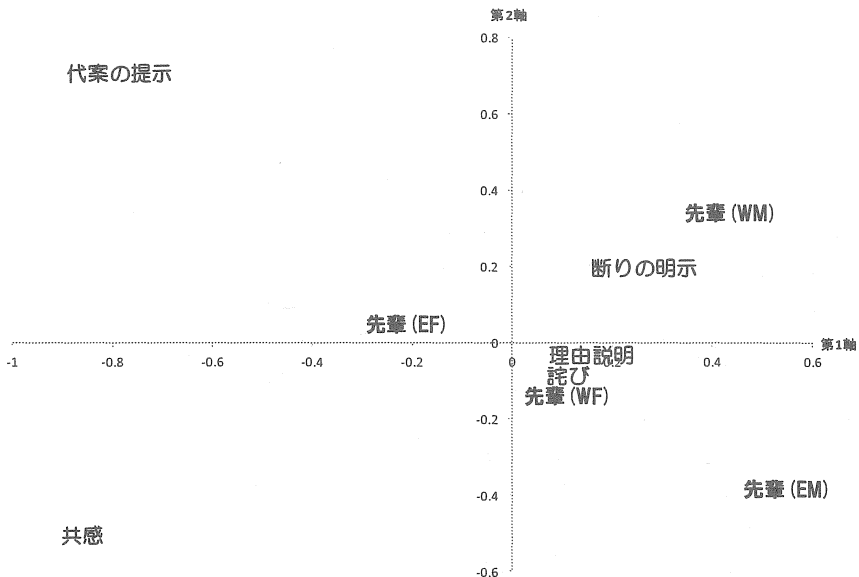


図1 意味公式の地域差・性差（先輩）

^{vii} 表4では百分率表示にしているが、以降の対応分析による散布図に関してはすべて実数を元に統計処理をおこなっている。

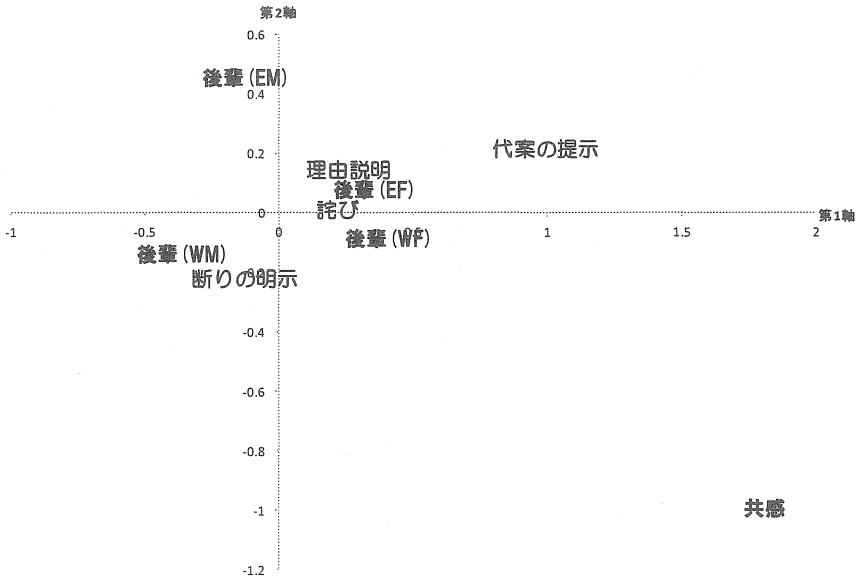


図2 意味公式の地域差・性差（後輩）

また EM、特に先輩(EM)が他と比較的離れた位置にあるのは、「代案の提示」や「断りの明示」の頻度が相対的に低かったためと思われる。

図1において「代案の提示」「共感」が原点から離れた位置にあるのは、前者が先輩(EF)、後者は先輩(EF)、先輩(WF)の出現頻度が相対的に高かったことが理由として挙げられる。これらのことから、意味公式の組み合わせの面で、女性は先輩に対する断り方のバリエーションが多彩であると言える。「理由説明」は平均 96.9%と高い出現率を有しているために回答パターンに個性や特徴を与える可能性は低い、「代案の提示」は平均 8.2%、「共感」は 9.5%の出現率しか有しておらず、それだけに使用の有無で回答に特徴を与えることとなる。

図2において最も特徴的なのは「共感」が独立していることであろう。これも前述したように全体的に「共感」の出現率が低い中、後輩(EF)、後輩(WF)での出現率が高かったことが理由となる。これは逆に言えば、男性は後輩に断る際には「共感」に類する表現をほとんど用いない、ないしは用いる必要性を高くは感じていないと言える。意味公式の中では特に配慮を示す役割を持つ「共感」だが、この点において男性は後輩への配慮の度合いは低いとみなすことが

できる。回答者属性に注目した場合、後輩(EF)と後輩(WF)の第1軸成分に関する値が非常に近く^{viii}、女性に限っては意味公式の組み合わせのパターンに東西差がほとんどみられず、後輩への断り方はよく似たパターンを示した。またこの図において明確な東西差が出ているとは言いがたいが、第1軸成分に関して言えば正の側にF、負の側にMが布置されており、回答者の出身の東西よりもその性別によるところが大きいと言え、東西差よりも性差が有意にはたらいっていると判断できる。

前述したことと多少重複するが、第1軸成分の絶対値が後輩(WM)は最も大きく特徴的である。これは「断りの明示」の出現頻度の高さもさることながら、「詫び」「理由説明」の出現頻度の相対的な低さも起因している。「共感」の出現頻度の低さにもよるが、その面は0件の後輩(EM)の方が強い。

五つの意味公式のうち、より特徴を示した「詫び」と「断りの明示」について次節以降で述べる。

4. 「詫び」にみられる特徴

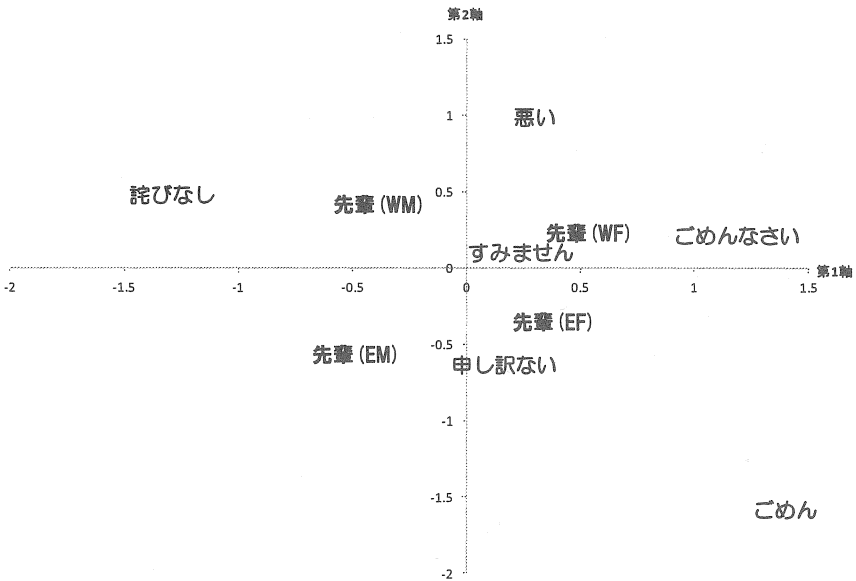


図3 「詫び」の地域差・性差(先輩)

^{viii} 第1軸成分の数値は後輩(EF)が0.157、後輩(WF)が0.203である。

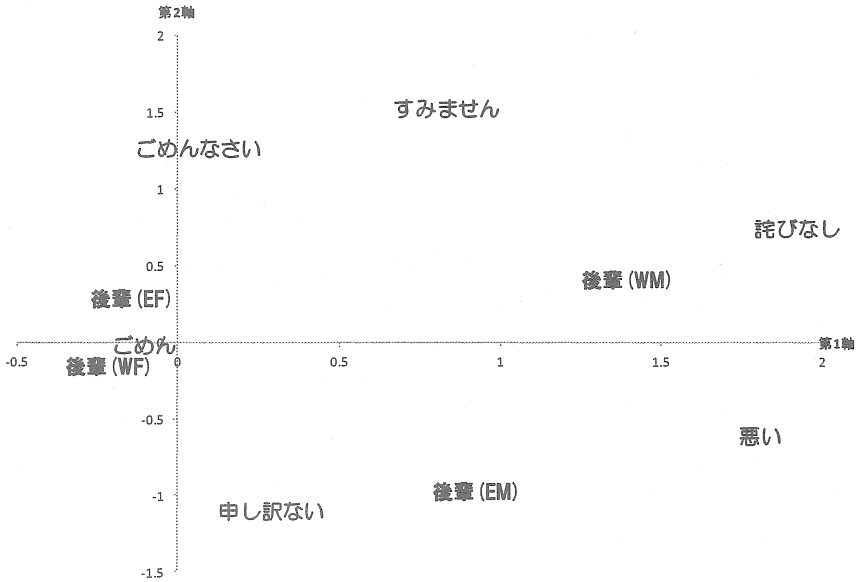


図4 「詫び」の地域差・性差（後輩）

意味公式「詫び」にあらわれた形式を、それぞれ「ごめん」「ごめんなさい」「すみません」「申し訳ない」「悪い」に分類し、集計した。形式としていずれの類があらわれるかをみたものであるため、形式上の敬語使用の有無や文末詞の違いなどは考慮に入れていない^{ix}。また断り表現において「詫び」があらわれなかったものは「詫びなし」としている。

「断り」表現における「詫び」の出現頻度は高く、平均93.7%の出現率となった。断る際の「詫び」は不可欠なものであると考えられる。後述するが、「断り」の意図伝達を担う「断りの明示」よりも「詫び」を優先的に用いるのは、何よりも相手への配慮を意識した結果であろう。

図3において、第1軸の寄与率は64.16%、固有値は0.0265、第2軸の寄与率は29.01%、固有値は0.0120、累積寄与率は93.16%であった。図4の第1軸の寄与率は77.04%、固有値は0.1465、第2軸の寄与率は12.24%、固有値は0.0233、累積寄与率は89.28%であった。

^{ix} たとえば「申し訳ない」には「申し訳ありません」や「申し訳ございません」も含まれている。

まず図3、図4それぞれの原点付近に布置された形式は「すみません」と「ごめん」であり、これらが「詫び」表現のうち、先輩によく用いられるものとして「すみません」、後輩によく用いられるものとして「ごめん」というように、相手との上下関係に応じて「詫び」の表現形式が異なることが分かる。

図3の第1軸成分に注目した場合、Fのある正の側に「ごめんなさい」、Mのある負の側に「詫びなし」が特徴的なものとしてあらわれた。先輩に対する「詫び」表現の性差は、その使用の有無と関連があると言えよう。第2軸成分に注目すると、Wのある正の側に「悪い」、Eのある負の側にある「申し訳ない」が特徴的である。「詫び」表現として一般的に用いられるもののうち、どちらかと言えば「悪い」は西日本的、「申し訳ない」は東日本的な性格を持つと言える^x。

図4は図3と比較して布置に偏りのみられる結果となった。Fが原点付近にあることから、女性は他の形式よりも「ごめん」をさかんに用いる^{xi}ということは自明である故、着目すべきは男性の回答となる。後輩(EM)は「申し訳ない」や「悪い」との距離が小さく、「ごめん」などの一般的な形式を用いるのではなく、より気持ちの表出を意識した形式に重きを置いていると考えられる。後輩(WM)は「詫びなし」や「悪い」との距離が小さい。図3、図4ともに言えることだが、WMに関しては「詫びなし」との共起性が高く、相手が先輩であれ後輩であれあまり「詫び」表現を用いない傾向にあることが分かる。また図3において「悪い」には西日本的性格があるとしたが、後輩に対しては全体的に男性の回答が近くに集まっており、性差が効いている。ちなみに「すみません」の位置に関しては、後輩(EM)で出現件数0であったことが大きく影響しているものと思われる。

以上より、両図の変数の布置のバランスから「詫び」において回答に差を生じさせる要因としては相手との上下関係がもっとも有意にはたらいており、また両図の第1軸成分にも注目すると、東西差よりもむしろ性差が少なからず見出される。

5. 「断りの明示」にみられる特徴

意味公式「断りの明示」にあらわれた形式を、それぞれ「行けない」「手伝えない」「無理」「駄目」「難しい」「厳しい」「お断りする」に分類し、集

^x ただし「悪い」の出現件数はEFに1件、WMに2件、WFに1件の計4件あらわれたのみで、実数的な意味では多く用いられる形式ではないことは付言しておく。

^{xi} これは「女性は「ごめん」以外をほとんど用いない」ということを意味するのではなく、あくまでも回答者属性内の割合によるものである。

計した。「詫び」同様、形式としていずれの類があらわれるかをみたものであるため、形式上の敬語使用の有無や文末詞の違いなどは考慮に入れていない^{xii}。また断り表現において「断りの明示」があらわれなかったものは「断りの明示なし」としている。

「断りの明示」自体の出現頻度は先輩で64.3%、後輩で73.9%と決して低くないが、「詫び」や「理由説明」と比較すると、優先的に用いられる形式ではないと言える。「断りの明示」が無くとも「断り」表現が成立するのは、他の意味公式さえ発話内に存在していれば、婉曲的ではあるが「断り」の意図を相手に伝達する役割を補うことが可能なためである。「断り」表現は「関係維持と意図の伝達の両方に配慮が求められる言語行動のひとつ」（尾崎・2006）とされるが、他の意味公式と比較して「断りの明示」が優先的に用いられないのは、相手の期待の拒否・拒絶の意図を直接伝達するのを避けることで、相手への配慮を優先させた結果であると判断できる。

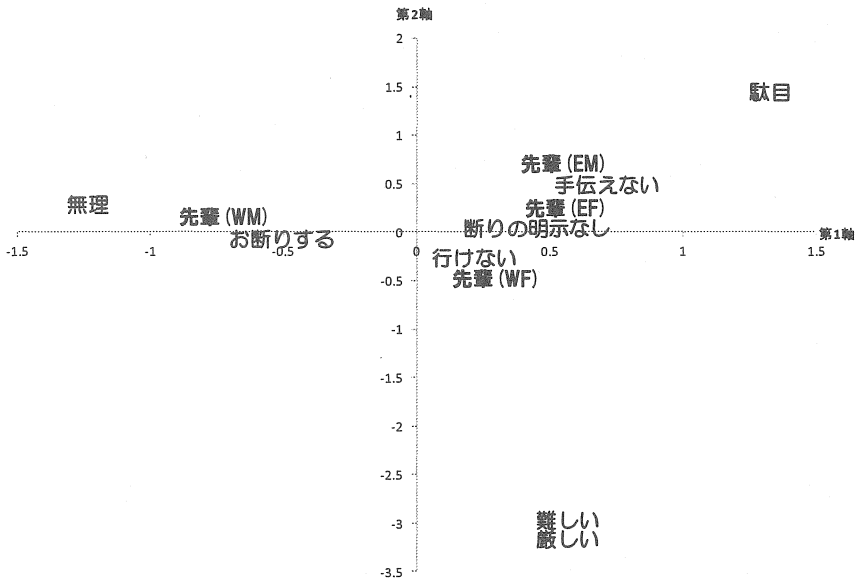


図5 「断りの明示」の地域差・性差（先輩）

^{xii} たとえば「行けない」に「行けません」や「行けないです」が含まれていることは「詫び」と同様だが、「お断りする」に関しては「断る」といった形式のものがあらわれなかったために、敬語の形式のままにしている。

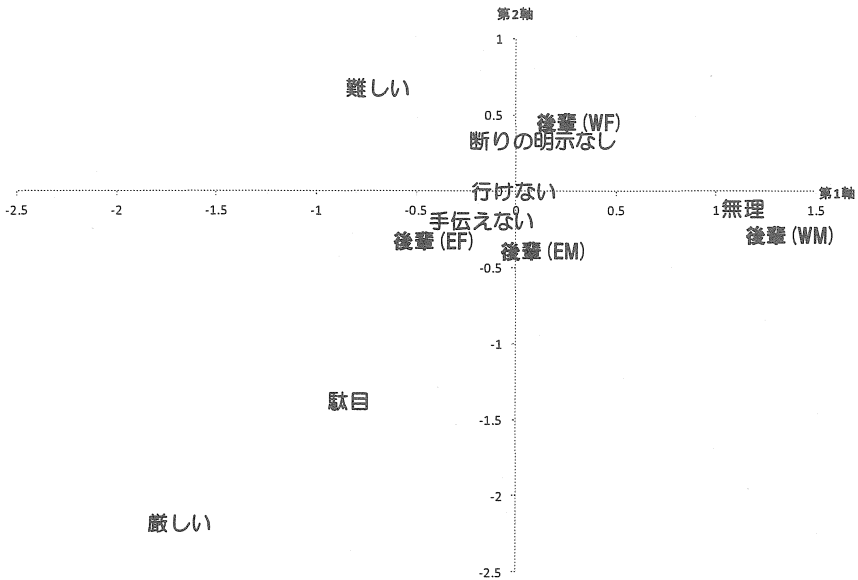


図6 「断りの明示」の地域差・性差（後輩）

図5において、第1軸の寄与率は72.70%、固有値は0.0479、第2軸の寄与率は21.91%、固有値は0.0144、累積寄与率は94.61%であった。図6の第1軸の寄与率は90.13%、固有値は0.1267、第2軸の寄与率は8.57%、固有値は0.0120、累積寄与率は98.70%であった。各変数の位置関係は似たものとなった。

図5、図6に共通して原点付近に布置されている形式は「行けない」と「断りの明示なし」である。この真逆とも言える両形式がともに原点付近に布置されるという点に疑問が生じる。これは前述した「断りの明示なし」に対して、意図の伝達を優先させたものと思われる。ただし「行けない」と明言した回答がまったく配慮を考えていないという訳ではなく、「詫び」や「理由説明」を入れることで相手への配慮を示すのである。両図の共通点としては、WMとそれ以外の回答者属性との距離があるということである。先輩(WM)では「無理」と「お断りする」、後輩(WM)では「無理」が近くに布置されており^{xiii}、「断りの明示」の中でもより直接的な表現であるこれらをよく用いることがWMの特徴

^{xiii} 後輩(WF)も「無理」の出現頻度自体は低くないが、他の形式の出現頻度も高かったために後輩(WF)の特徴たりえなかった。

と言える。WMは断る際に明言する傾向が強いとみることができる。

また両図においてEM、EFと「手伝えない」との距離が小さく、どちらかと言えば「手伝えない」という形式は東日本の性格を持っていると判断できる。「手伝えない」は手伝うことそのものの可能性を否定し、「行けない」は手伝いに行くことそのものの可能性を否定している。意味するところにさしたる差はないが、後者がより婉曲的表現である。「断りの明示」を用いる際に、より直接的に表現するか、少しでも配慮して婉曲的な表現を選択するかという点において差がみられたものと言えよう。その意味において、東日本出身者の回答からは「断り」を明示するならいっそ直接的におこなおうという意思が感じられる。

形式面でみると、「お断りする」は先輩(EM)以外の先輩への回答にのみあらわれたものであり、特徴的なものの一つである。相手の依頼に対してもっとも直接的に断る意思を表明した形式ではあるが、相手への配慮がない訳ではなく、敬語形式の表現であることもさることながら、曖昧な表現を避けることで相手に下手な期待や勘違いを起させることを避けているのである。勘違いが生じることで未来に起こり得る障害を排除するという点で相手へ配慮を示していると言える。

「詫びなし」以外の直接的表現形式に対して、「難しい」「厳しい」は婉曲的表現形式である。手伝うことや手伝いに行くことが「難しい」ないしは「厳しい」と表現することによって明言を避けている。婉曲的な表現は相手にこちらの意図を汲み取ることを要求することでもあるため、曖昧さ、それによる勘違いが生じる可能性を孕むという意味で出現頻度は低く、故に原点から離れて布置されることとなった。

両図から、「詫び」と異なり「断りの明示」における差は相手との上下関係が大きな要因とはなっておらず、むしろ“WMとそれ以外の差”としてあらわれており、西日本出身、男性という属性の両方が大きな要因となった。

6. 配慮評価

断ることによる心的負担がどの程度であるかを、相手への申し訳なさの度合いとして問うたものが質問項目の二問目である。ここではその数値を、清水ほか(2011)と同様に配慮評価とする。図7に回答者属性別の集計結果を、表5に配慮評価の平均値と標本分散の値を示す。

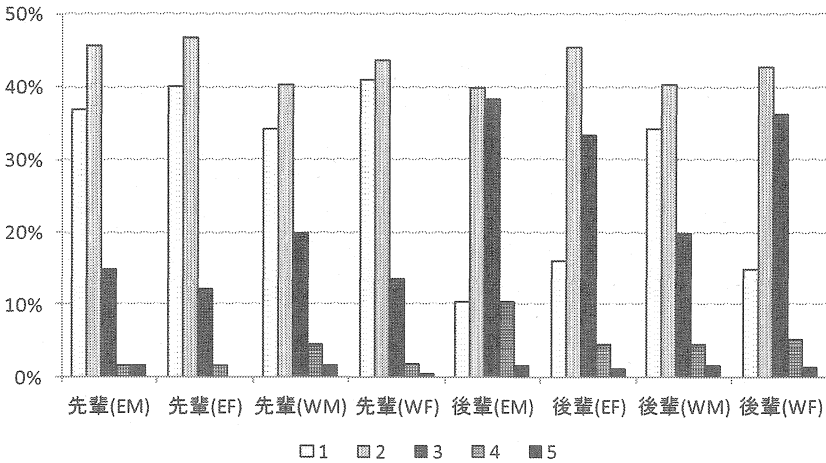


図7 「詫び」の地域差・性差

	先輩(EM)	先輩(EF)	先輩(WM)	先輩(WF)	後輩(EM)	後輩(EF)	後輩(WM)	後輩(WF)
平均	1.853	1.750	1.992	1.770	2.529	2.290	2.797	2.357
標本分散	0.684	0.514	0.856	0.590	0.749	0.670	0.763	0.711

表5 配慮評価の平均と標本分散

平均値を単純に小さい順に列挙すれば、先輩(EF)、先輩(WF)、先輩(EM)、先輩(WM)、後輩(EF)、後輩(WF)、後輩(EM)、後輩(WM)となっており、まず大きく分けて後輩よりも先輩に申し訳なさを感じていることが分かる。断る際の心的負担は目下よりも目上に対してより大きいものとなるということである。東西差、性差でみた場合、WよりもE、MよりもFがそれぞれ心的負担を感じていると判断することができ、また先輩(EM)と先輩(WM)との配慮評価の開きよりも先輩(EM)と先輩(EF)との開きが大きいことなどから、配慮評価に差を与える要因としては東西差よりも性差の方が優勢であることが考えられる。ただし、後輩(WM)に関しては配慮評価の平均が最大^{xiv}であることや後輩(EM)との数値の開きが多少大きかったことなどから、地域差(東西差)、性差の両方が利いている可能性が考えられない訳ではない。

配慮評価の平均を列挙するのみでは不十分と考え、回答者属性別の配慮評価

^{xiv} この中では最大値を示しているが、無論外れ値ではない(有意水準 0.01)。

の散らばりの程度をみるために、それぞれの標本分散を比較する。平均値と同様に標本分散の値を単純に小さい順に列挙すれば、先輩(EF)、先輩(WF)、後輩(EF)、先輩(EM)、後輩(WF)、後輩(EM)、後輩(WM)、先輩(WM)となる。あくまでも相対的なものではあるが、先輩(EF)がもっとも一般的な回答パターンを、先輩(WM)がもっとも多様なパターンを示す結果となった。つまり先輩に対してFはほぼ同じような申し訳なさをおぼえ、WMは特に先輩に対して申し訳なく感じる度合いは人それぞれであると言える。WMの想定する先輩との親密さに個人差が生じた可能性があり、質問文の精度の問題も考えられるが、ここにおいてはWMという回答者属性の特徴とも取ることができよう。

7. おわりに

本論文は、大学生の用いる「断り」表現について地域差、性差の視点をもって、意味公式のパターン、「詫び」の形式、「断りの明示」の形式、配慮評価の四つから分析をおこなったものである。

依頼内容が同一の場合、相手が先輩であるか後輩であるかがまず表現の違いを与える要因となること、次いで性別が要因となることが分かった。地域差(東西差)に関しては、「断りの明示」の出現率が高いことや、後輩に対して「無理」をよく用いること、また標本分散の値が高いことなど各項目で特徴を示したWMによくあらわれた。またEFは特に先輩に対する回答において、「代案の提示」や「共感」の使用率が高かったこと、配慮評価の値が低かったことなどの点に特徴がみられた。このようにEFにも多分に特徴が認められ得たことから、出身の東西もまた表現の違いを与える要因の一つとして数えられよう。

今後はより多くの、且つサンプル属性の偏らないデータの収集を目指し、さらに断る内容の軽重も踏まえた質問項目を取り入れた調査を実施することで、「断り」表現に関する研究を深めたい。

参考文献

- 伊藤恵美子(2006)「日本人は断り表現において丁寧さをどう判断しているか—長さと適切性からの分析—」『異文化コミュニケーション研究』18 神田外語大学
- 尾崎喜光(2006)「依頼・勧めに対する断りにおける配慮の表現」『言語行動における「配慮」の諸相』国立国語研究所
- 蒲谷 宏、金 東奎、高木美嘉(2009)『敬語表現ハンドブック』大修館書店

- ジェニー・トマス著 浅羽亮一監修 田中典子, 津留崎毅, 鶴田庸子, 成瀬真理訳 (1998) 『語用論入門 - 話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味 - 』研究社
- 小泉保編 (2001) 『入門語用論研究 - 理論と応用 - 』研究社
- 小泉保 (1990) 『言外の言語学』三省堂
- 清水勇吉 (2009) 「依頼表現に見るポライトネス-性差のかかわりを中心に」『徳島大学国語国文学』22 徳島大学
- 清水勇吉、趙 塔娜、プロイヤー・ビクトリア (2011) 「誘いに対する断り表現について」『徳島大学国語国文学』24 徳島大学
- 肖 志、陳 月吾 (2008) 「依頼に対する断り表現についての中日対照研究」『福井工業大学研究紀要』第二部 38 福井工業大学
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法7』くろしお出版
- 蒙 韞 (2009) 「中国人日本語上級学習者の語用論的特徴の一考察--依頼に対する断りパターンから」『小出記念日本語教育研究会論文集』17 小出記念日本語教育研究会
- 蒙 韞 (2010) 「日中断りにおけるポライトネス・ストラテジーの一考察—日本人会社員と中国人会社員の比較を通して—」『異文化コミュニケーション研究』22 神田外語大学
- 山岡政紀、牧原 功、小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門—』明治書院
- 吉井千明 (2009) 「断り表現—親しさの度合いに注目して—」『東京女子大学言語文化研究』18 東京女子大学言語文化研究会
- 李 野 (2005) 「談話的観点からみた依頼表現」『信大日本語教育研究』5 信州大学人文学部日本語教育学研究室
- ローレン・フェルドマン、ジェイムズ・サンガー著、辻井潤一監訳、IBM 東京基礎研究所翻訳 (2010) 『テキストマイニングハンドブック』東京電機大学出版局